



# 東北大学大学院国際文化研究科

## 同窓会会報 第3号

編集・発行：東北大学大学院国際文化研究科同窓会事務局 発行日：2005年3月1日

〒980-8576 仙台市青葉区川内41 TEL (022)795-7556 FAX (022)795-7583 E-MAIL: int-kkdk@bureau.tohoku.ac.jp

郵便振替口座名称：国際文化研究科同窓会・郵便振替口座番号：02220-5-66621

### フランス・レンヌ市 レンヌ第2大学・パリ市訪問記

阿部 弘子（教務係長）

2004年11月2日から8日の日程で、東北大学大学院国際文化研究科小林文生教授（評議員、国際交流委員会委員長）、笹木まち子庶務係長と私の3人が、仙台市公式代表団（藤井仙台市長、鈴木市議会議長、大槻交流政策課長、他）とともにレンヌ市、レンヌ第2大学及びフランス外務省等を訪問しました。

レンヌ市はフランス北西部のブルターニュ地方の中心都市で、大学都市・若者の街とも言われ、レンヌ第1大学（理系）、レンヌ第2大学（文系）等があります。仙台市とは姉妹都市協定が結ばれて38年、国際文化研究科はレンヌ第2大学と部局間協定を結んで、学生の交換留学、学术交流が行われています。



<ブルターニュ高等法院前ひろば・市内視察>

（左から2人目が藤井仙台市長、右端は小林教授、その隣が筆者）

今回の訪問はこうした背景を元に実現したのですが、レンヌ市の概要説明・視察では歴史と施策の違いに、レンヌ第2大学では学生数に対して東北大学より少ない職員数での仕事内容やレンヌ市との連携等に、さらに、女性の活躍ぶりに目をみはり、国際交流についての思いを新たにしました。

公式行事とは別に、世界遺産のモンサン・ミッシェル見学、



関係者にお招きいただいたお宅でのフランス家庭料理のもてなし、ルーブル美術館、ノートルダム寺院、シャンゼリゼの散策等、感動とともに得がたい経験をさせていただきました。

2007年の「仙台におけるフランス・レンヌ年」にむけて、今回の経験を元に、私に何ができるのか模索しているところです。

#### 第4回同窓会総会と講演会のご案内

第4回総会と同窓生による講演会を次のとおり開催します。講演会に引き続き国際文化研究科との共催により、平成16年度修了祝賀会が開催されますので、奮ってご参加ください。

お誘いあわせて  
多数ご来聴ください！

日時：平成17年3月25日（金）15：15～16：45

場所：マルチメディア教育研究棟・6階大ホール

講師：後藤 致人（岩手県立大学盛岡短期大学部国際文化学科助教授）（アジア社会論講座・後期課程修了）

演題：「短大教育と国際文化」

注）詳しい内容を同窓会ホームページでお知らせしますのでご覧ください。

<http://www.intcul.tohoku.ac.jp/dosokai/>

### 第3回同窓会総会と講演会のご報告

国際文化研究科同窓会の第2回総会は、平成16年3月25日（木）国際文化研究科平成15年度学位記伝達式の終了後、午後3時15分より、マルチメディア教育研究棟6階大ホールにおいて開催されました。

次に講演の概要を紹介します。

#### 講演要旨：江戸は何を語るか

- 宮城学院女子大学国際文化学科の教育経験から -

千葉 正樹（東北大学附属図書館研究員）

私は国際文化の学位を持つ日本研究者として、江戸という特殊日本的領域を通して、人類社会の普遍を語りうるのかというやっかいな問題を抱えてきた。ところが最近、いくつかの講義を担当するようになったことで、光が見えてきた。教育という現場では単純化して、かみ砕いて述べるのが求められるわけだが、それが私の研究における理論化を促してくれたのである。今回は、日本近世とは early-modern（初期近代）なのか、pre-modern（前近代）なのか、という課題に絡めて、最近考えていることを報告する。

16世紀終わりから17世紀初頭にかけて、日本では数百の新計画都市＝城下町が建設された。最近、豊臣秀吉の発した「惣無事令」という命令が中世から近世への転換をうながしたという考えが通説となっている。この命令は領主間の私戦を禁止し、戦国の社会状況に終止符を打つものであった。「惣無事」＝平和を確立するために、武士以外の人々による武装の禁止、すなわち一般に「刀狩り」といわれる政策が実施され、さらに、武士身分を確定し、そこに権力を集中するということが行われた（兵農分離・兵商分離）。その上で、武士たちは限定された城郭のもとに集住することを促された。つまり城下町とは、軍事力を集中管理するための「武士の容器」であり、地域的平和を確立する空間装置であった。こうして地方段階で武士による暴力のコントロールを成し遂げたわけではあるが、それは大名に暴力を集中させることでもあった。大名による暴力のコントロール空間、それが中央政権によって築かれた「総城下町」であった。「大名の容器」となった江戸は、政治的・軍事的首都であることによって、全国規模の平和維持装置になったのである。

幕藩体制とは「役」＝公共的負担行為を媒介とする身分・社会・空間の軍事的編成であるが、こうして誕生した城下町、特に江戸はその結晶ともいえる存在であった。近代の指標としては、たとえば資本の自由、居所の自由、議会制民主主義、租税制度、官僚機構、大衆文化、表現の自由などがある。だが、計画された江戸ではイエを単位とする経営の固定があり、居所は身分別に編成され、武士によって政治過程は独占された。すなわち、理念としての日本近世社会は近代以前 pre-modern と考えるしかないのである。

しかし、17世紀中葉から江戸では計画されなかった空間が

継続的に成立していく。頻発する大火に対抗するために幕府は江戸の中心部に防火帯としての空き地＝火除地を準備していく。ここはいわば幕藩制社会に空いた裂け目であり、役と身分との結びつきが無い。空間管理の請負を提起した都市市民は仮設施設の設定権を、いわば「役」に対する「分」として獲得していく。ほどなく火除地は茶屋や芝居小屋などの仮設施設に覆われた空間、「盛り場」となっていった。盛り場維持を訴える都市市民の「難儀」の論理は幕府の認めるところとなり、そこには官僚としての認識を読み取れる。盛り場はいわば文化の市場として機能し、大衆文化の真の拠点となった。また、軍事的境界外へのスプロールは百万都市の成立を促し、計画されなかった辺縁としての江戸＝「場末」を生み出す。そこには百姓町屋＝耕作しないが百姓身分として年貢役を務める「町人」によって形成された都市空間が展開する。この年貢役は早々に金納化し、租税と変わらない内容になっていった。

このように江戸の都市化には、資本の自由、居所の自由、租税、官僚、大衆文化といった近代の指標とされる現象が、萌芽的だが大量に見いださるのである。もっとも欧米的近代を基準とした場合には、たとえば政治過程の民衆参加や科学技術といった欠落は多いのだが、それでも江戸の外では合議制・選挙制を伴う地域運営も始められており、技術限界を前提とする合理の追求が一般的に行われるようになっていた。すなわち日本近世とは pre-modern から early-modern への遷移の時代として検討することが求められよう。

（アジア社会論講座）

#### < 新着情報 >

#### 国際文化研究科の21世紀COEプログラム

#### 「言語・認知総合科学戦略研究教育拠点」活動報告（2）

堀江 薫（異文化間教育論講座・教授）

本COEの活動も平成14年10月の開始よりすでに二年半近くがたちました。この間に、平成15年度、16年度に各2回、計4回の「言語・脳・認知」国際学術フォーラムを開催しました。このうち第3回目のフォーラム（平成16年6月）は、本学とケンブリッジ大学の学術交流を記念して行われた東北大学ケンブリッジフォーラムの一環としてケンブリッジ大で開催され、他3回は仙台市において開催されました。これらのフォーラムは、韓国高麗大学、韓国科学技術院(KAIST)、米国ライス大学、ワシントン大学、英国ロンドン大学、ケンブリッジ大学、ブリストル大学、マックスプランク心理言語学研究所（オランダ）、マックスプランク神経科学研究所（ドイツ）、理化学研究所（日本）など、アジア、欧米の言語、脳、認知に係わる最先端研究者と、本COEの研究者（教員およびポスドク）、大学院生との研究交流の契機となりました。また、この他に20回に及び言語・認知科学分野の公開講演会を行い、さらに16年12月には、仙台市民



<第1回市民講演会「脳・こころ・ことばを探求する」>  
の方に本 COE の活動を分かりやすく紹介する機会として、第1回市民講演会「脳・こころ・ことばを探求する」を川内北キャンパスにおいて開催し、市民の方々250名に参加いただきました。これらの活動および今後の催しについては、本 COE のホームページ (<http://www.lbc21.jp/>) をご覧ください。

本 COE の最重要目標の一つは、大学院生、特に博士後期課程学生に、言語・認知総合科学分野における最先端教育を提供し、自ら国際水準での研究活動が出来る研究者として育成することです。実際に、本研究科の博士後期課程に在籍し、本 COE の研修制度を利用して脳機能イメージング学の研修を受け、従来の理論言語学研究と脳科学の融合を目指す新しい研究領域に取り組んでいる学生が何人も育ってきています。本 COE のリサーチアシスタントを経て、すでに大学の専任講師やポスドクトラルフェローとして研究・教育職に就いた研究科の卒業生も複数います。

本年は、中国科学院の心理学研究所をはじめとする、アジア諸国の言語・認知総合科学の最先端研究機関との連携を一層強め、国際学術フォーラムの共同開催、学生や教員の共同研究、相互派遣などを実施していきたいと考えておりますのでご支援のほどよろしくお願いいたします。

## 就職後の近況報告

中村 学 (神戸大学国際文化学部助教授)

平成13年度に博士号を取得して卒業した後、半年間、日本学術振興会の特別研究員を務めました。その後、神戸大学国際文化学部の助教授に採用されまして、現在に至っています。専門はサウジアラビア王国の政治や歴史の研究です。現在私が住んでいる神戸は、私には全く初めての土地でしたが、学部は六甲山の裾に位置する小高い場所に位置しており、東北大の国際文化学部とも似た雰囲気を毎日味わっています。

当学部に着任してわかったのですが、神大国際文化学部と東北大学国際文化研究科は、設立準備段階から現在まで、どちらも「国際文化」を冠する学部・研究科として、親密な交流が保

たれておりました。学部・研究科の歴史や構成には類似する点が多く、着任した後では、ずっと馴染むことができたような気がしています。

大学院の時代と較べると、本を読んだり、資料のノートを作成するような研究作業に専念できる時間は大変に少なくなりましたが、一方では、他の研究者との交流の機会に恵まれ、刺激を受けています。当学部には、同年代の若手研究者がけっこう多いのですが、政治学研究者が4名~6名揃ったことから、自分が着任した半年後から学内研究プロジェクトを始めることとなりました。自分は中東を専門地域としていますが、他に米国、英国、仏国、政治思想などを専門としている新しい仲間と「グローバル化と国際政治」をテーマとして楽しく実り多い研究を続けております。

また平成16年の日本国際文化学会のシンポジウム「国際社会における公共性の可能性を問い直す」の企画係を担当したり、学部創立10周年記念シンポジウム「人間の安全保障」を一緒につくりあげたりしました。当学部にも、学部学会として神戸大学国際文化学会なるものが設置されており、その企画理事を担当することになりました。このような共同作業の中では、自分の専門に専念する研究作業とは一味違った観点から研究について考えたり、フュージョンのような予想できない成果を生み出す体験があると知りました。

教員になった後では、自分の研究やアイデアについて「相談する相手」は学生や院生になるのだとわかりました。講義の際には受講生に質問を義務付けているのですが、学部生とはいえ、1回の授業で30人ぐらいが返してくれる質問からは、自分が気づかなかった観点がいろいろあるのだな、と驚いています。

悩みは、地道に研究書や資料の精査に取り組む時間がほとんど確保できないことです。同僚の研究者も、ほとんどが同じ悩みを共有しているように思われます。こういう状況が続くと、研究機関としての基礎的な力が先細りしないのかなと心配です。この2月には、サウジアラビアに現地調査へ行く予定ですが、下調べを十分にしておくための時間のやりくりで苦心しています。

今後は、自分の第一の専門である中東研究を続けることにはなりますが、学会や共同研究、その他の場所を通じて同窓生の皆様と接する機会が増えるかと思われまます。今後ともどうかよろしく願い申し上げます。

(イスラム圏研究講座)

### 会員名簿(改訂版)の発行

平成17年度に発行する予定です。

ご住所等の確認をさせていただきますので、同封のはがき、または電子メール等でご回答くださいますようお願いいたします。

国際文化研究科同窓会事務局

## 新会員の紹介

平成16年4月に入学、進学及び編入学した新会員を紹介します。

### 博士課程前期2年の課程

#### <国際地域文化論専攻> (15名)

##### アジア文化論講座

本郷 泰規

##### ヨーロッパ文化論講座

高橋 梓

##### アメリカ研究講座

菅股 和也、高橋 淑子、古山 温、吉岡 宏祐

吉永早津季

##### イスラム圏研究

太田 和哉、松原智栄子

##### 比較文化論講座

犬飼 響、小畑 英、折館 寛子、金 亨 洙、津田 美鈴

楊 政 亜

#### <国際文化交流論専攻> (36名)

##### 言語コミュニケーション論講座

板垣 温子、小山田ひとみ、JOHN LUCAS BARRETT

高橋 龍次、久好 孝子、和田 恵理

##### 経済交流論講座

川村 明美、董 增 祥、DULMAA DAGVADASH、包 海 珍

##### 科学技術交流論講座

柴戸 涼介、張 兆 宏、DUNAI DEMBEREL、巴雅尔

梁 娜 瑛、RADNAABAZAR UNURTSETSEG

##### 言語文化交流論講座

ONYSHCHENKO VYACHESLAV、諸 貞 熙、宋 善 花

包 海 生、LI KUNYO、LIANG XIN

##### 異文化間教育論講座

ERDENEBAT YADAMSUREN、王 路 明、金 廷 珉

盛 文 淵、蘇 桂 芳、NAYANBAATAR AMARJARGAL

森 聡美

##### 国際資源政策論講座

榎本 多恵、敖日格勒、佐藤 庄市、CIHANGIR ERDAL

LKHAGVASUREN ARIUNZAYA、MUNKHZAYA MEND-OOYO、呂 妍

#### <国際文化言語論専攻> (12名)

##### 言語生成論講座

笹川いづみ、佐藤慎太郎、高橋 真彦

##### 多元言語文化社会論講座

池田久美子、岳 軍、BADAM KHURELBAATAR

##### 言語応用論講座

遠田 裕紀、大原 藍、鳴澤 拓

##### 言語教育体系論講座

YEE CHIG DE MARUYAMA ANGELICA MARIA

藤本美佐子、山田康太郎

### 博士課程後期3年の課程

#### <国際地域文化論専攻> (4名)

##### アメリカ研究講座

朝立康太郎

##### イスラム圏研究講座

染矢 文恵

##### 比較文化論講座

孫 恵仁、古河美喜子

#### <国際文化交流論専攻> (12名)

##### 言語機能論講座

HUI TING

##### 言語コミュニケーション論講座

李 美賢、大嶋 秀樹、蔣 千苓、原 由紀恵

##### 科学技術交流論講座

齋藤 優子

##### 言語文化交流論講座

鄭 世 桓

##### 異文化間教育論講座

石原 庸兆、玉地 瑞穂、平川 八尋、横山 悟

##### 国際資源政策論講座

松本 年史

#### <国際文化言語論専攻> (11名)

##### 言語生成論講座

JEONG HYEON JEONG、鈴木 涉、高橋 久子

##### 言語システム論講座

小堂 俊孝、佐藤奈津美

##### 多元言語文化社会論講座

久慈 達也、GURITA LUMINITA CARMEN

PRIELER MICHAEL、KHOJIKYAN RUZAN

##### 言語応用論講座

漆原 幸子

##### 言語教育体系論講座

尾形まゆみ

## 会費・寄付金の納入のお願い

会則第11条、12条、付則第2項に基づき、次に該当する会員の皆様に会費等の納入をお願いいたします。

平成16年4月入学、進学及び編入学で未納の方

(1) 国際文化研究科前期課程の学生：4,000円

(2) 国際文化研究科後期課程の学生：6,000円

上記以外の方(修了生、在学生、現教員・元教官等)は、ご寄付という形でご支援をお願いいたします。

1口 2,000円(何口でも結構です。)

会費・寄付金とも、最寄りの郵便局からお振り込みいただくか、または国際文化研究科教務係までご持参くださいますようお願いいたします。

郵便振替口座名称：国際文化研究科同窓会

郵便振替口座番号：02220-5-66621

## ご意見・ご希望・ご提案等を!

同窓会のこれからの事業について、ご意見・ご希望・ご提案等がございましたら、事務局までお知らせください。

郵便、または本会報題字欄に示してあるアドレス宛の電子メールでも結構です。

注) 3月22日より、電話番号の局番が217から795に変わります。